

第 32 回（令和元年度）

「国際交流・国際理解のための小中学生による作文コンクール」

優 秀 作 品 集



令和元年 1 1 月

公益財団法人小佐野記念財団

■ 目 次 ■

最優秀賞

中学校の部 題名「タイ人との交流を通して」

北杜市立甲陵中学校 3年 富岡 ^{とみおか} 水 ^{すい}…………… 1

優秀賞

小学校の部 題名「国際交流ってどんなこと」

山梨大学附属小学校 5年 矢竹 ^{やたけ} 彩乃 ^{あやの}…………… 3

中学校の部 題名「私の広がる世界」

都留市立都留第二中学校 2年 小俣 ^{おまた} 山葵 ^{わさび}…………… 4

題名「本当の国際交流を旨として」

北杜市立甲陵中学校 3年 小名木 ^{おなぎ} みなみ…………… 6

佳作

小学校の部 題名「題名「ときどきわくわくの海外旅行」

甲府市立舞鶴小学校 5年 佐藤 ^{さとう} 千瑛 ^{ちえ}…………… 7

中学校の部 題名「異文化コミュニケーションについて」

甲府市立南西中学校 1年 名執 ^{なとり} 華称 ^{はな}…………… 8

題名「私の人生計画」

甲府市立北東中学校 3年 深澤 ^{ふかざわ} 和 ^{なごみ}…………… 9

最 優 秀 賞

中学生の部 最優秀賞

「タイ人との交流を通して」

北杜市立甲陵中学校 3年 富岡 水

私は今年の夏休み、タイ北部の都市チェンライに行き、山岳少数民族を支援するNGOのボランティアに参加しました。ここでは、外国人ボランティア、外国人インターン生、タイ人などたくさんの方が共同生活し、グループに分かれて様々な活動を行っています。私の主な活動は、山岳少数民族の子供たちが通う小学校での日本語の授業、幼稚園での子供の世話でした。小学校に週三回、幼稚園に週一回のペースで行きました。授業の内容は過去の日誌を参考に自分たちで考え、計画します。子供たちが楽しく学べるような授業にするため、毎回長い時間話し合って準備しました。準備のときは、英語・タイ語・日本語が飛び交います。準備を協力して行うために、それぞれがわかる言葉を少しずつ補い合ってコミュニケーションをとるのはとても新鮮な経験でした。そして小学校や幼稚園で、子供たちともしっかりコミュニケーションを取りたいと思った私は、必死でタイ語を覚えていくようになりました。「ファン(聞いて)」、「スワイ・マイ(とても可愛い)」、「スッヨーイ(すごい)」、「カイヤンマイセット(誰かまだ終わっていませんか?)」、「セットゥルーヤンカ(終わりましたか?)」などです。最初は緊張した声かけですが、私の拙いタイ語が子供たちに通じたときはとても嬉しくて、自信に繋がっていきました。自分から声をかけなければいけない状況を繰り返すうちに、私はいつの間にかタイ語を覚えていきました。

週末はNGOの施設から離れて、山岳少数民族の村にホームステイに行きました。私が行ったのはラフ族の住むヤフー村です。ガイドのヤカーさんの家にお世話になりました。ヤフー村で驚いたことは、電気がほとんどないことです。村の中心に小さなソーラー発電機が一台あるだけで、この電気を村人が順番に使っています。つまり、ほとんどの家に十分な電気が通っていません。私が行ったときも、夕食の最中に暗くなってしまい、ろうソクを出してくれました。村人は早寝早起きで、夕食のあと暗くなれば就寝します。日本での私の生活とは違い、電気を使わないですむ生活を送っているのです。またヤフー村では基本自給自足です。なかでも竹が生活のあちこちに利用されていることには本当に驚きました。家の材料にも調理にも、皿や箸やカップにもすべて竹を使います。刃物を器用に操って、その場で次々に竹を加工している姿は目が離せませんでした。私も実際にコップを作ってみました。力の加減や細かい部分がとても難しかったです。また竹を筋に沿って細かく切ったもので作る指輪の作り方も教えてもらいました。昔は男性がこの指輪を作って、結婚指輪にしたそうです。ヤカーさんは「お金がないからみんなこうしている」と笑って言っていましたが、あるものを使うという工夫と、心のこもった手作りの指輪はとても素晴らしいと思いました。そしてもう一つ驚いた

ことは村に病院がないことです。病気にならないようにすることが一番ですが、村人は病気になると村にいるキムラ人のもとへ行きます。キムラ人とは神に存在が近い人のことを言うそうです。薬は無いけれど、キムラ人の指示通りにすると病が癒えるそうです。ラフ族は神を信じており、暮らしのなかにごく自然に神の存在があるのだそうです。

タイに滞在中、お世話になったスタッフの「NGOの施設でも、ボランティアをするときも、工夫が大切」の言葉を頭のすみに置いて、毎日工夫することを考えて過ごしました。最初は大自然の環境で、部屋に大きな虫やネズミが出たり、雨期で蚊が大量発生したり、水のシャワーしかないことなどに慣れなくて、本当にここでやっていけるのか心配でしたが、いつの間にかそんなことには慣れてしまって、もっとここにいたいと思うようになりました。タイには「サバイ(気楽に)」という言葉があります。大らかなタイ人の性格と自然の中の暮らしに触れていると、私も不思議と同じように思えるようになっていました。私はタイを訪れる前、山岳少数民族が抱える問題を学んでから行ったので、ここの人たちはもっと貧しくて大変な思いをしていると思っていました。しかし実際に私が出会った人たちからは貧しさを感じませんでした。決して裕福ではないし、日本と比べると不便を感じる暮らしです。でも彼らは自分たちの生活を楽しんでおり、それがとても豊かに見えました。これは実際に行って、見て、体験して、感じなければわからないことでした。私が最初難しく思えたことも、終わる頃には慣れて楽しく思えるようになったこともそうです。ボランティアに行ったはずの私が逆に素晴らしい体験をさせてもらったことに感謝の気持ちでいっぱいです。今回の自分の活動が少しでも彼らのためになっていれば嬉しいです。

優

秀

賞

小学生の部 優秀賞

「国際交流ってどんなこと」

山梨大学附属小学校 5年 矢竹 彩乃

私は、国際交流なんて、自分には関係の無いことだと思っていました。でも、よく考えてみると、思い当たる出来事がいくつかあったのでおどろきました。

私の母は、今年の夏に、中国に出張に行っていました。そして、帰ってきた母のおみやげから、いくつか発見をしました。例えば、書道を習っている私に習字バッグに入らないくらい大きな筆を買ってきてくれました。ここから、中国は、筆の生産が有名ということを知ることができました。もう少し、中国の筆の生産について調べると、現代日本で作られている筆の作り方は、中国から伝わった作り方ということが分かりました。昔から、交流があったと分かり、おどろきました。

他にも、母のとった写真からも学ぶことができました。その写真には、現地のガイドさんが入っていました。ガイドさんたちは、どの写真でも日本人と楽しそうに話しているのにおどろきました。なぜなら、ニュースを見ていると、とてもピリピリしている人がうつっているからです。しかし、うつっているガイドさんは、とてもフレンドリーそうなので、少し中国人のイメージが変わりました。

思い当たる出来事はもう一つあります。私は、3年生の夏にハワイに旅行に行きました。そこで、オーストラリア人のおばさんに会いました。私の妹は、少し目が悪いので、目がねをかけています。そんな妹に、おばさんは、目がよくなりたければ、にんじんを食べなさいと言いました。なんでだろうと思ったら、おばさんは、にんじんが好きなうさぎはめがねをかけていないから、と教えてくれました。オーストラリアには、こんなにおもしろい話があると分かりました。

いままでしてきた、国際交流は、とても楽しかったです。なので、これからはもっと、国際交流の機会を増やしていきたいと思います。そして、どんな人とも仲よくなれる人になりたいです。

中学生の部 優秀賞

「私の広がる世界」

都留市立都留第二中学校 2年 小俣 山葵

私は、5歳から、クラシックバレエを習っています。踊ることが大好きで、でも、人前では、恥ずかしくて、自分を表現する事が出来ませんでした。

レッスンに行くのが、楽しく、スタジオのお姉さん達の踊る姿を見て、とても素敵で、羨ましく思いました。

小学4年生になると、先生から「コンクールに挑戦してみない？」と、声をかけられました。初めてのバリエーションで、すごくドキドキでした。いつか、先生みたいな、素敵なバレエダンサーに、なる事を夢にみながら、いつも、一生懸命、最高の自分を表現出来るように努力してきました。私は、この初めてのコンクールをきっかけに、色々なコンクールに挑戦しました。しかし、毎回、決戦まで進めても、上位入賞には、入れず、コンクール挑戦し始めてから、2年以上は、前へ進めず、悩んでいました。

中学1年になり、国内、海外で、活躍するダンサーを目指す、広がる希望の夢、大阪「ワールドドリームコンペティション」に、挑戦しました。この頃から、自分の中でも「世界を視野に」と考えるようになりました。今までのコンクールとは違い、クラシックバレエと、コンテンポラリーダンスの2つの審査があります。いつか、出場してみたい、世界大会では、このような審査方法が多いので、世界へのチャンスを、つかむ為に、このコンクールを選びました。

審査員の先生方は、現在海外で活躍しているダンサーの方々に、オーラがすごく、私もいつか…と夢みながら、体の中からこみあげてくる何かを感じました。絶対に、と、強い意志でのぞみ、結果は、初めての上位第3位。念願のシカゴ短期留学も副賞で、ついてきました。レベルの高い、海外のレベルを、自分の目でみて、体で感じる事ができる、チャンスを勝ち取りました。

そして、渡米する日がついにきました。私の胸はドキドキでした。初めての海外。とても楽しみな気持ちと、心や体が緊張して、思うように動けるか心配な気持ちでいっぱいでした。

ジョフリーバレエスクールのスタジオは、日本には、無い雰囲気です。部屋の壁いっぱいの窓で、素敵な空間でした。

そして、私の受講するジュニアクラスのメンバーとコミュニケーションのとり方が分からず、ご対面する日が来ました。私は、英語が話せず、色々な面で不安がありましたが、クラスメイトは、あたたかく向かい入れてくれました。言葉が話せなくても、ジェスチャーや自分の気持ちを伝えようとする心があれば、通じ合える事を知りました。

同じバレエをしているメンバーそれぞれ、自分をアピールするポイントやレベルの高い技術、しっかりとぶれない基礎。とても、刺激になりました。

審査員長先生の計らいで、ジョフリーとピッツバーグの両方でプライベートレッスンも受講させていただいて、自分の欠点、苦手分野を、しっかりと見つめ合えた時間でした。

日本では味わえない、盛り上がり方、積極的に自分をアピールする順番通りではなく、自由に。すごいですね。さすがアメリカです。

目標としている、目指している夢が同じ方向を見ている仲間とは、単語しか分からず、英語が話せない私でも、通じ合えた感動が忘れられません。

将来、このすばらしい機会をあたえてくれた環境を感謝しながら、日々の努力を重ねていきたいと思います。

いつか、世界で輝けるバレエダンサーになれるように。そして、絶対に世界に飛び立ちます！

カッコいいバレエダンサーになります！次回、渡米する時には、アメリカンジョークの1つも言えるように、コミュニケーションの取り方など、英語を勉強していきたいと思います。

「本当の国際理解を目ざして」

北杜市立甲陵中学校 3年 小名木 みなみ

私は韮崎市のホームステイ事業に参加し、アメリカのフェアフィールド市へ三週間滞在しました。そこで体験した二つの出来事が、私に本当の国際交流を教えてくださいました。

ある日、ホストファミリーの家で過ごしていた時のこと。ホストファミリーから、アメリカの映画を観ようと提案されました。私は観たいと思った反面、英語を聞きとり、内容が飲みこめるか心配でした。そこで、日本語字幕をつけてほしいとお願いしました。するとホストファミリーは、「英語字幕のほうが良いわ。日本語字幕ではあまり勉強にならないから。」

と言い、英語字幕をつけてくれました。そこでハッと気がつきました。その時その時で精一杯で、つつい便利なものの力を借りようとしてしまっていたこと。英語の勉強のことよりも、ただ聞きとれるか、話せるかを気にして努力を怠っていたこと。ホストファミリーが優しさだけでなく、私のために、と厳しくしてくれたからこそ、自分の力で頑張ることの大切さを身に染みて感じました。英語字幕をつけて観た映画は、完璧に内容を理解することはできませんでしたが、日本語字幕で見るよりずっと良かったと思います。

もう一つの出来事は、クリスマスシーズンだったので、ホストファミリーの親戚や友達が集まってパーティーをしていた時のこと。みんなで食事をしながら自己紹介をしていると、ふと初対面のアメリカ人の女の子に、「イヌとネコ、どっちが好き？」

と聞かれました。どうやらアメリカ人同士で話していて、私にも意見を求めてきたようでした。正直、日本人の私がいるから日本の話になるかなと思っていましたが、その後もそこまで日本のことについて話すことはありませんでした。それよりも、他愛のない話を沢山しました。その時、日本に興味がない訳ではなく、自分をアメリカ人と同等に扱ってもらえているのだと感じました。私にとって国際理解というのは自分たちと違う文化を見つけ、それへの理解を深めることだけだと思っていました。しかし、日本人だから特別何か、ではなく普段の会話に当たり前のように混ぜてもらったことで、本当の意味で国境を越えた絆が生まれたと思いました。自分たちとの違いだけでなく、この話題は世界共通なんだ！とか、意外と似てるところあるなあ、など、やっぱり同じ人間だと感じることも、国際理解の一つなのではないでしょうか。

今回、私に沢山の刺激を与えてくれたホストファミリーをはじめ、現地で出会った全ての人に感謝しています。これからの英語への向き合い方も大きく変えてくれました。今回出会った人たちと、自分の英語力不足で話せなかったこともいっぱいありました。悔しさ、もどかしさ、そして伝わった時の嬉しさ、全ての感情を忘れずに今後も英語を一生懸命勉強していきたいです。また、国際交流は一回きりではなく続けていくことに意味があると思います。積極的に外国人と関わる機会を持ち、今回学んだことを生かして交流していきたいです。

佳 作

小学生の部 佳作

「どきどきわくわくの海外旅行」

甲府市立舞鶴小学校 5年 佐藤 千瑛

私は、七月の二十四日から七月の二十七日までの間お母さん、妹、私の三人で初めての海外旅行に行きました。場所は、ロシアのウラジオストクです。

初めて体験したことが二つあります。一つ目は、飛行機です。まず、高速バスに乗って千葉県の成田空港まで行ってから飛行機に乗りました。飛行機の中は少しせまくて、私達の席はつばさの横でした。景色は見えたけれど、あまり良い景色は見えなかったので残念でした。そこから二時間でロシアに着きました。

二つ目は、ウラジオストクの路線バスです。このバスは、一度乗ってから下りるまで、どこまでも二十三ルーブルで日本円だと約四十六円です。とても安いです。私達は市内中心部から終点のルースキー島の沿岸地方水族館で降りました。

次にロシアと日本のちがいを三つ見つけました。一つ目は、お金です。ロシアのお金の単位はルーブルです。Pと書いてルーブルと読みます。一ルーブルが約二円なので、ルーブルの金額にける二をすれば、日本円の計算が出来ます。

二つ目は、トイレです。日本のトイレは、トレットペーパーを流しますが、ロシアのトイレはトレットペーパーを流してはいけないのでそれは、ゴミ箱にすてます。もしトレットペーパーをトイレに流したらつまってしまうので気を付けました。また、お店にトイレがない所が多いので、二十ルーブルを支払い仮設トイレを使いました。

三つ目は、地下道です。ロシアは、信号がなくても横断歩道があると必ず止まってくれますが、横断歩道がないと絶対に止まってくれなくてあぶないので地下道を使います。地下道には色々なお店もあり、トイレもあるので安心です。

初めての海外旅行でのロシアは、どきどき、わくわくの旅行でした。また、日本とのちがいがたくさんあってそれをみつけるのが楽しかったです。

中学生の部 佳作

「異文化コミュニケーションについて」

甲府市立南西中学校 1年 名執 華称

私は外国人が嫌いだ。なぜ英語をならわないといけないのだ。—つい最近までそう思っていた。—

だいぶ前にばく買いという言葉が流行っていた。ニュースでたくさんこう入っている中国人観光客を見て、こんなに買ってどうするんだ、日本の分がなくなってしまうのではないかと思ってた。また、ニュースで流れる外国かんれんのもは良いニュースより悪いニュースの方が多いため、外国は危ない。外国人は危険だと思えば違う外国人観光客一人一人を注意してみてしまった。

年を重ねていくうちに、海外との交流が多くなった。学校では外国語活動などの海外の伝統や行事をとり入れることが多かった。しかし、私は心の底から楽しむことができなかった。年を重ねても外国人はやさしいんだと思うことができなかった。

しかし、四年の春。私に外国人の印象が変わる出来事がおとずれた。私は家族でハワイへ旅行に行くことになった。私はとても不安だった。なにかおこるのではないかとひやひやした。不安をかかえながら日本をとびたつた。

八時間の長い空の旅が終えついにハワイについた。ハワイにはいろいろな国からきている観光客であふれかえていた。私はおびえた。話がつじない外国人と話すなんて無理だと思いつ込んでいた。初日は、きんちょうや不安で周りになじむことができなかった。次の日、海に行った。海にはたくさんの方がいた。海は好きだが外国人が多すぎて楽しめなかった。

その日の夜。ステーキを食べに行った。その店の店員はすごい顔がこわかった。しかし、私はその店員の行動により外国人に対しての考え方が変わった。店員はナブキンでかぶとをつくり、弟の頭にのせたのだ。私はその行動にびっくりした。今まで思っていた外国人と全くちがったのだ。店員はとてもおもしろくあいそがよく、話しかけてくれた。私が見てきた日本人の店員はこういうことをしなかったので、とても外国人の印象をかえるきっかけとなったのだ。その出来事から私はハワイ旅行を楽しむことができたのだ。買い物でもレジで店員としゃべることができた一言の会話だったが私にとってはとても思い出になった。言葉つじたときは日本人ではあじわえないことをあじわうことができ、とてもよかった。

そして外国人のイメージを一番変えることができた帰り便。帰りはむかい風で私はひどくよってしまった。自分でゴミ袋をとることもできないくらいよつたのだ。そんな中となりのにのつていた外国の女性がゴミ袋をさしのべてくれて声をかけてくれたのだ。その時、私は言葉がつじなくても表情で伝わりその女性はとてもやさしかったのだ。

私はこの旅行をとおして外国人も日本人と同じようにやさしく、見た目ではんだんしてはいけないと、あたりまえのことがわかつた。

今は外国人を好きだと思っている。心か広くおもしろいからだ。来年は東京オリンピックだ。外国人がたくさん日本にくるので外国人と会つたら少しでも話せれるように英語の勉強をたくさんしたい。

「私の人生計画書」

甲府市立北東中学校 3年 深澤 和

私は今年の夏、はじめて福島の子どもたちのための保養キャンプにスタッフとして参加しました。二〇一一年の福島原発事故により、屋外で遊ぶなど、日常生活に制約がある子どもたちのために立ち上がったキャンプ。今年は、例年とは方法を変え、短期間のキャンプではなく、『中期保養』となりました。参加者が滞在日数を決め、自然豊かな土地を生かしたワークショップなどを通して楽しみます。その中で、私は大きな夢をもらいました。

一年ほど前、友人がドイツに留学しました。もともとその人は違う目的で旅立ったのですが、一時帰国して会いに来てくれた時、彼女は住みこみでボランティアスタッフをしていたという『ドイツ国際平和村』(以下『平和村』)について話してくれました。

彼女の話によると、平和村は、紛争により大きな傷を負っても現地では十分な治療を受けられない子どもたちをドイツへ送り、必要な治療とともに平和村で時間を過ごしてもらい、ここからだも健康になって母国の親もとへ帰ることが目的なのだそうです。彼女がスタッフをしていた間も、イラク、パレスチナ、シリアから来ていて、紛争によって体の一部が吹き飛んでしまった、切断せざるをえなかったという子どもも多くいました。言葉で言いあらわすことが難しいのですが、その時に彼女が見せてくれた写真や報告は、私の胸に深く突き刺さったことを覚えています。

福島から保養キャンプにやってきた家族には、平和村のように目に見える傷は見当たりません。でも、ふだん安全な環境にいる私たちの普通の食事を、彼らは「おいしい！」と目を輝かせて安心しきったように何度もおかわりしていました。川へ遊びに行く予定の日は、朝からずっと水着を着て「まだ行かないのー？」とそわそわしていました。何度遊んでも飽きないそうです。そのわが子を見つめるお母さんの表情も、幸せそうでした。また、福島からだけでなく、心に傷をかかえたり、生きづらさを感じたりしている子どもも、スタッフのみなさんはありのまま受けとめ、その環境の中で子どもたちはいやされていました。私は、彼らの日常の中での環境がおよぼす影響を改めて実感しました。見えない傷があることも知りました。

しかし、平和村、保養キャンプにも、それぞれに課題点もあるように思いました。どちらにも共通して言えるのは、継続的な支援が難しいことです。平和村の場合は、具体的には義手や義足を用意しても、メンテナンスできない、からだ、こころのケアを続けられないということです。保養キャンプでは、短期でも中期でも、保養できる期間は一時的であり、それを日常にすることはできません。

今の私の夢であり目標は、すべての子どもが安心して心から笑っていられる場所をつくることです。そのために、私は医療資格をとり、スタッフとして働こうと考えていました。でも、先日中村哲さんのお話を聞き、考えが変わりました。先生は、肩書きは医師ですが、井戸を掘り、用水路を建設し、水を確保することにつとめられました。それは、先生が偏りなくその問題の根本を見つめた結果だと思えます。原発と戦争は、全く違っているようでつながっているように感じます。なぜなくなるのか。どうして必要なのか。誰のために必要なのか。犠牲の上に成り立っているのはなぜか。私も表面や一方でなく、目をそらすことなく見極めたうえで、自分がすべきこと、できることを探します。

第 32 回（令和元年度）
「国際交流・国際理解のための小中学生による作文コンクール」
優 秀 作 品 集

令和元年 11 月 発行

発行者：公益財団法人小佐野記念財団
山梨県甲府市丸の内一丁目 6 - 1
(山梨県観光部国際観光交流課内)
TEL055(223)1435